

## 福祉機器の活用による業務省力化

### ～安心・安全・安楽な介護を目指して～

都道府県：北海道

会員施設名：樽前かしわざ園

発表者氏名：鈴木 太朗、八尋 信子

#### I. 実践の目的・ねらい

利用者の移乗動作は介護者の腰部への負担が大きく、腰痛により仕事を休まざるを得ない、または退職せざるを得ない状況であった。また、痛みを抱えながらも日常の業務にあたる職員もいる。人が人を介護するのが当たり前、体重がある方も頑張っているのが当たり前という考え方の中で日々の介護を提供してきた。

介護者の身体的負担や離職を減らしていくため、また、より安全で安心な介護を提供することを目指し福祉機器の活用に取り組んだ。

#### II. 実践方法・取り組んだこと

天井走行リフトを平成 22 年度に 2 台、24 年度に 6 台、25 年度、26 年度各 1 台、28 年度に 2 台の計 12 台を整備した。導入当初、職員からは「時間がかかる」「手間がかかる」「(使うのが)面倒くさい」「介護は機械ではなく人がするもの」等の意見が出た。利用者からも「機械で吊るされるのは、物を扱うようで嫌だ」「怖い」「人に直接やってほしい」「人にやってもらった方が安心」等の声が聞かれた。

しかし、職員の身体への負担軽減や安全・安心な介護を提供していくため、対象となる利用者に対しては理由を説明し、同意の上で使用を徹底した。また、職員に対しては、上司が率先して使用していくことで、時間や手間がかかっても使う事を徹底した。また、日頃のミーティング等の際に自分の身体を守る事になることを繰り返し説明してきた。

#### III. 実践の結果

平成 19 年度～23 年度と、リフターの台数を増やした平成 24 年度～28 年度で腰痛が原因で休んだ職員数と日数の平均で比較すると、前者は 5 名・23 日/年間だったが、後者は 4 人・9.2 日/年間となった。人数は若干の減少であったが、休んだ日数については 60%短縮と改善が認められた。

職員の意識についても、「リフトでも人の手でも、慣れればかかる時間はあまり変わらない」「使い慣れたら、リフトがないと困る」と、リフトが介護の手段の 1 つとして定着したことが伺えた。利用者からは、「職員に抱えられると、落ちたり転んだりという不安があったが、正しくリフトを使用してもらえれば安心して車いすに乗ることができる」「機械でも人でもちゃんとしれければどちらでも良い」「できればリフトは使用せずに、地に足を着けて立つ形で移乗したい」等変化が見られた。

#### IV. 分析・考察

この取組みにより、身体的負担が軽減され、介護職員が腰痛により休む日数が減少したことで、適切なサービス提供体制を確保することができている。適切なリフトの使用により安心・安全・安楽な介護の提供が可能となる。「サービス提供体制の確保」と「安心・安全・安楽な介護」を提供することが、利用者の日々の生活を守ることに繋がっていると考えられる。今後も福祉機器を活用していくが、機械頼りになるのではなく、利用者の立場になって、手の温もりや心遣いを忘れないよう配慮をしていきたい。

※事例等の使用は利用者本人（家族）の承諾を得ています。

## 移乗用リフトの導入・定着化に向けた取り組み ～移乗介助に着目して抱え上げない介護へ～

都道府県：茨城県

会員施設名：青嵐荘つくし園

発表者氏名：吉田 真純、高村 裕美

### I. 実践の目的・ねらい

介護業務は、多くが腰部に過重な負担となる作業が多く、介護者が、ご利用者を抱きかかえて介助すると、腰痛になるリスクが高いとされ、慢性的腰痛に悩む介護者が多い。平成25年の「職場における腰痛予防対策指針」の改定ではリフト使用などの移乗介助方法の省力化・自動化が推進された。リフト使用の利点は、腰への負担軽減、介護技術の統一化、職員の休業や離職率の低下などであるが、当施設では、「抱え上げた方が速い」「機器の利用は面倒くさい」とリフト導入に対しては、否定的であった。

しかし、現在よりもさらにご利用者の障害の重度化・高齢化が進むことを考えると、移乗用リフトと福祉機器導入を進める必要性を強く感じ、平成26年3月から床走行式リフトを導入した。①職員の意識改革、②腰痛予防等介護者の負担軽減、③安心・安全な移乗介助、④抱え上げない介護の定着化、の実施を目標とした取り組みについて報告する。

### II. 実践方法・取り組んだこと

当施設では腰痛予防対策委員会を発足させ、3ヶ月に1度委員会を開催するなかで、リフト導入・定着化とリフト以外の福祉機器導入の検討を行い、①腰痛リスクの軽減(予防及び緩和)、②安心・安全な移乗介助の実施を目標とし、導入・定着に向けた科学的・計画的・効果的な取り組みを開始した。

機器導入の計画立案、リフト対象者の選定、ご利用者・職員のニーズの把握や介護負担状況のアンケートを実施した。介護の中で最も負担になる場面と導入しやすい時間帯から開始し、個別支援計画書にプラン化しモニタリングを継続した。職員への教育として、座学研修、実技研修(業者との意見交換会等も実施)、現場実践を行い、機器操作性の向上に努めた。ご利用者に合った介助を目指し、新たなリフトの検討やスリングシートでのデモを何度も繰り返し、使用課題等の振り返りを行った。

### III. 実践の結果

リフト使用についての意識が高まり、日常的にリフトを使用することができている。職員は、「体が楽」、「時間を短縮して使用するにはどうしたら良いか」、「他の人にも使用したい」等、身体的な負担軽減や操作性の向上・機器使用に対する意識の変化がみられる。その他、一人でリフトを操作し移乗介助できる事で、ご利用者を待たせないことや、他の業務に入ることができ、サービスの向上につながりつつある。ご利用者からは、「揺れが少ないので怖くない」、「思っていたよりも安心」、「自分も使用して欲しい」等の意見が挙がっている。更に、移乗用ボードを導入し、入浴時でのストレッチャー⇄ベッド間の抱え上げない介護を目指している。

### IV. 分析・考察

委員会の発足により、組織的な活動を推進でき、業務改善と実践方法の習得ができ、良い効果が期待できる。実践・評価を何度も繰り返すことで、職員の意識改革につながった。身体に過度な負担を伴う業務の改善や介護技術の統一化は、職員の定着化や職員の年齢・性別に関係なく働ける労働環境改善につながると考える。

※事例等の使用は利用者本人(家族)の承諾を得ています。

## コーヒーでつながる笑顔の輪

### ～利用者主体の活動について～

都道府県：茨城県

会員施設名：さくら苑

発表者氏名：柳田 洋明

#### I. 実践の目的・ねらい

平成25年4月施行の障害者総合支援法には「障害者がある能力及び適性に応じ、社会生活を営むことができる」と明記されています。しかし、当施設では、実際には業務優先で単調になりがちな施設の生活において、入居者自身が主体的に出来る活動について模索していました。その頃、コーヒー好きの施設長より、施設の中に喫茶店を開店出来ないか？との提案があり、入居者に聞き取りしたところ、「やってみたい」との声が多く挙がったため、「さくら苑喫茶コーナー」の開店を目指すことにしました。

実践により、入居者自身が主体的に活動することで、日常生活の満足度を高められると考えました。

#### II. 実践方法・取り組んだこと

さくら苑初の試みの実現に向けて、まず、入居者10名程で3カ月間会議を開きました。入居者自らが自由に意見を出しやすいよう、ブレインストーミングを採用し、相手の意見を批判しないことをルールとしました。司会進行はサビ管が行い、アドバイザーとして栄養士も参加し、入居者からの質問や相談事項に答えられる体制をつくりました。ただし、最低限決めなければならないテーマは職員が呈示し、1) 実施日時、2) 実施場所、3) 役割分担、4) メニュー内容、5) コーヒーの作り方等について議論を行いました。

話し合いの結果、実施日時は毎月1回水曜日、実施場所は食堂、役割分担は個々の能力に応じて、①注文受付係、②料金受取り係、③カプセル準備係、④マシン操作係、⑤売り上げ集計係と決定しました。

備品については、手先を動かすことが困難な入居者でも、カートリッジを挿入すればボタン一つで抽出できるコーヒーメーカーを選定しました。また、看板やコースター等も、余暇活動の時間に手作りすることで、担当者だけでなく、多くの入居者が参加できる喫茶コーナーを目指しました。

#### III. 実践の結果

自分が淹れたコーヒーを他の入居者が美味しそうに飲んでくれる姿を見たり、直接「美味しかったよ」と言葉をかけられることに喜び、やりがいを感じ、次の活動への意欲につながっていると考えます。

初めは多少ぎこちなかったマシンの操作や、開店を知らせる苑内放送なども回を重ねるごとに上達しており、入居者自らが目的を持って自発的に活動し、日々の生活に楽しみを増やすきっかけになったと思います。

#### IV. 分析・考察

活動を実施してから今年で4年目を迎えますが、今ではすっかり当たり前の日常風景になりました。しかし、改善が必要な点も残されています。例えば開催頻度を増やしたり、夜間も開催できないかなど、入居者の希望が全て実現できているわけではありません。しかし、入居者が自らの活動を振り返り、課題をクリアしていくためにどうすれば良いか？を考えることは、職員が提供するだけの余暇活動では見られなかったことであり、自らの生活を主体的に考える一歩になったと考えます。

## 園芸の持つリハビリテーションの力

### ～利用者の活動を生む仕組み～

都道府県 : 広島県

会員施設名 : ときわ台ホーム

発表者氏名 : 木村 将希

#### I. 実践の目的・ねらい

施設内委員会として食生活検討委員会があり、職種は管理栄養士、生活支援員、看護師、厨房委託業者、理学療法士で構成される。「利用者のおいしく、楽しみのある食生活」を目的に活動している。活動内容は4分野 ①美味しい、②楽しい・嬉しい、③健康、④安心・安全 にわたり、多職種で連携しながら、食に関する専門性を集約している。今回、「②楽しい・嬉しい」食生活の一環として、“園芸”と“調理イベント”をリハビリテーション職が運営した結果、考察を得たので発表する。

#### II. 実践方法・取り組んだこと

##### 1. 期間

平成28年5月1日～12月31日（土日を除く）

##### 2. 対象者

入所の利用者120名のうち、園芸・調理イベントに興味を持った利用者。

##### 3. 方法

訓練室の中庭に、園芸コーナーを設置。利用者が主体的に活動できる環境を整えた。次の活動を作業療法として扱い、リハビリテーション職が利用者の活動を支援した。

(1) 園芸：野菜（トマト・ミニトマト・なす・オクラ・たまねぎ・にんにく・じゃがいも・さつまいも）づくり。灌水・観察・剪定・追肥・収穫・看板・ポスターづくりなど。

(2) 調理イベント：夏野菜カレーづくり1回、さつまいものお菓子づくり1回。

#### III. 実践の結果

園芸コーナーは、利用者の生活とリハビリテーション職の業務に馴染み、多くの活動・交流が生まれた。8か月間の期間中、作業療法の実施記録の件数は次の通り。

1. 園芸：57名、548回（うち511回は5～8月）。

2. 調理イベント：夏野菜カレーづくり67名、さつまいものお菓子づくり36名。

#### IV. 分析・考察

取り組みの当初の目的は、楽しい・嬉しい食生活であったが、取り組みを通して、園芸の持つリハビリテーションの“力”を感じるようになった。利用者の生活に、活動を生む仕組みを浸透させることは、リハビリテーションを提供するうえで重要なことである。園芸は、多くの利用者に適応可能であり、多くの活動を生み出した。このようなリハビリテーションを展開できた要因として、園芸から派生する活動が多いこと、園芸が持つ授産活動の要素に注目している。現在、利用者に対する園芸を継続中であり、今後の発展に努めたい。

※事例等の使用は利用者本人（家族）の承諾を得ています。

## 福祉機器を応用した移乗介助の事例

### ～抱え上げざるを得なかった利用者の移乗介助の工夫～

都道府県：広島県

会員施設名：白木の郷

発表者氏名：溝下 真二、中川 亮介

#### I. 実践の目的・ねらい

骨粗鬆症、慢性関節リウマチ、関節可動域制限のあるA氏の、ベッドからリクライニング式電動車椅子「以下、電動車椅子」への移乗方法は、ベッドに平行に着けた電動車椅子に臥床状態のまま、スタッフ2名が両脇と両下肢をそれぞれが支えて抱え上げる形であった。その事により、スタッフの身体的負担が大きく、腰痛の一因となっていた。またA氏は、抱え上げによる移乗介助を行う事で、骨折のリスクがあった。スタッフの腰痛予防を図ると共に、抱え上げによって起こる、A氏の骨折のリスクを無くす事を目的として、福祉機器を活用した移乗方法を試みた。

#### II. 実践方法・取り組んだこと

福祉機器の選定をするにあたり、リフトによる移乗方法の検討をしたが、関節可動域制限に伴う、A氏の身体的負担が大きく、抱え上げと同様に骨折のリスクがあるために難しかった。そこで臥床状態のまま移乗できる方法について検討した。

1. イージーロールの使用による移乗方法
2. スライディングボード「以下、ボード」2枚と、スライディングシート「以下、シート」の2種類の福祉用具を併用した形での移乗方法。

#### III. 実践の結果

1. イージーロールの使用による移乗方法においては、ボード上での体重移動が困難で、ボード上で抱え上げる必要があり、移乗後、車椅子上にてボードが抜けにくかった。
2. ボード、シートの併用による、A氏の移乗方法においては、抱え上げず、力を使わず、スムーズで安楽な介助が可能であった。

スタッフ、本人への負担軽減、リスク面にも適していた2の方法を採用し、介護スタッフへのレクチャーを実施した。その結果、スタッフの腰痛緩和、負担軽減に繋がっている。またA氏の抱え上げられることの恐怖心、抱え上げによって起こる骨折のリスクを無くす事ができた。

#### IV. 分析・考察

これまで、ボードとシートの使用は、用途に応じて使い分けしていたが、今回の事例にあたって、2つを組み合わせた方法を検討した。その結果、それぞれの特性を組み合わせる事でA氏とスタッフの身体への負担軽減と、A氏の骨折のリスク回避を可能にしたと考える。イージーロールの使用方法において、A氏の電動車椅子への体重移動は難しかった。その原因の一つとして、体重移動を用いた介助方法が初めての試みで、スタッフの技術不足があった事も考えられる。

これからも、福祉機器を有効に活用する事で、ケアの質の向上が図れると感じる。障害の特性を見極め、多くの介護スタッフが福祉機器の適材適所の活用が可能になる様よう、努めていく。